天眼鏡

困難に追い込まれるEUの家族農業

7月下旬にスウェーデンで所用があり、そのついでにフランス、イタリアそして一部ではあるがドイツも含めて農村を歩いてきた。2年ぶりのヨーロッパとなるが、今回、特に強く印象に残ったのがトウモロコシの生産が増加していることで、経営規模の拡大がすすむだけでなく、風景・景観までも変わりつつあるように感じられた。コムギ等からトウモロコシへの生産シフトは、直接支払を受け取るにはトウモロコシが最も容易であることによるという。これについては統計資料を踏まえての検証が必要であるが、ともすればEU農業は手厚い直接支払によって、担い手の確保と規模拡大を推し進めており、概して安定した農業経営が確保されているように受け止められがちであるが、農業経営は決して楽ではないのが実情であり、また直接支払受給にあたっての規則・制約等によって経営の画一化が進行しつつある。こうした中でEUは家族農業経営をどう位置付けていくのか大きな問題に直面しているように受けとめられた。ここではイタリアでの事例の一つを上げておきたい。

イタリアの中北部、トスカーナ州にあるクティリアーノという人口1570人ほどの山岳地帯にある小さな町のイ・ファウフィという農場である。酪農、ジャガイモ・野菜、養鶏とあわせて、チーズ生産、アグリツーリズモ（民宿）、レストランをも経営しており、まさに複合経営・多角経営である。経営面積は森林も含めて120haで、40haが放牧地、25ha弱が牧草採草地として利用されており、成牛20頭ほどが、5月から10月まで放牧される。放牧は伝統に沿って行われ、夏場は1,300mの高地で放牧を行い、冬場は町場近くにある畜舎で飼育される。チーズ加工施設は下の畜舎のそばにあることから、夏場でも搾乳した牛乳は標高差400m前後もある山道を下りおりて運搬される。労働力は夫婦2人に、ご主人の弟の3人。放牧と畜舎の管理は男が中心で、チーズ加工、アグリツーリズモ、レストランは奥さんのダニエラさんの受け持ち。ダニエラさんには15歳になるマルティーナさんと4歳のミケーラちゃんの2人の女の子があり、マルティーナさんはお手伝いとして貴重な戦力でもあるが、夏場は毎日、下の町の学校までダニエラさんが車で送り迎え。ダニエラさんは、ミケーラちゃんの相手もしながら、まさに百人力の仕事ぶり。奥さんの過剰な負担で家族農業経営が何とか回っているというのが実情である。

ここ数年での所得に占める直接支払の割合は25%から50%だそうだ。直接支払なくして経営は困難なことは事実であるが、これ以上の規模拡大は困難であるとしている。直接支払がなくても今の生産基盤を守って家族経営を維持していきたいというのが本音であり、今後、直接支払とどう折り合いをつけていくのか大きな課題だとしている。放牧地の素晴らしい景観や、牧羊犬や鶏と戯れ、草地を走り回るミケーラちゃんを見るにつけ、家族農業経営のもつ多様な意義を実感するが、もはやEU共通農業政策ですら家族農業経営を維持していくことは難しい局面にある。農業の本質的意義があらためて問われているといえる。

（農的社会デザイン研究所　代表
蔦谷　栄一）